

2009年度

夏号

冬号

一級建築士事務所(有) オザワプランニング
E-メール: info@ozplan.jp
ホームページ: http://www.ozplan.jp
住所: 〒064-0944 札幌市中央区円山西町2丁目3-4
事務所 TEL/FAX (011) 613-2023
自宅 TEL/FAX (011) 615-3544

赴任先の北海道に来てから15年。その後独立して10年がたちました。事務所開設当初から発行しているこの「0Zリポート」も10年目です。

今回のリポートは、10年間の回想と、これからの5年間の活動計画をご報告します。



10年間で作った模型の一部

建築家の寿命は長いことで知られています。若尾文子さんの夫でもあり有名な建築家で2007年亡くなられた黒川紀章氏は享年74歳。亡くなられる前年には、国立新美術館の設計で話題になっていましたし、現在でも建設中の建物が世界中にあります。

黒川氏の師匠に当り東京代々木のオリンピック室内競技場や東京都庁の設計で有名な丹下健三氏は享年91才。80代はバリバリの現役でした。

自分の10年後も、油のりきった60代でありたいものです。まずは来る5年間に達成目標を定めます。

まずは10年を振り返ってみます：

① 変わらぬこと

私の好み

友人に言わせると、私の設計する建物では黙っていると、丸太と薪ストーブをすぐに設置したがるそうです。ワンパターンといわれても、丸太には過ぎ去った何十年という時間が年輪となって刻み込まれていますし、薪の炎には生命を感じるのですから魅力は尽きません。



構造材の梁として使われている丸太

グループホーム『ひまわり-II』



ストーブの背後には、さりげなく丸太が使われている

『円山西町の家』

好みというのはなかなか共有することが難しいものです。私の好きな薪ストーブも、人によっては子どもの頃経験した冬の寒さを思い出させ、検討対象外になるケースもあります。自分の好みはハッキリしているのも設計者の条件と思いますが、押し付けではありません。

住まいづくり

10年間住宅設計と高齢者施設の設計をしてきました。何故か商業施設や公官庁の仕事などには積極的な働きかけをしてきませんでした。これも相性なのでしょう。

先日札幌市で活動されているボランティア団体職員のお話が印象的でしたのでご紹介します。その方は市内の220箇所もの有料老人ホームなどを訪れて、高齢者向けに住み替えのアドバイスや建物の第三者評価資料などを作成されていますが、これだけの数訪問を重ねると、建物の良し悪しは玄関に入って5分もすると分かってくるといいます。

部屋の広さやどれだけバリアフリーになっているか、献立や施設がどれだけ立派かなどではなく、訪問者に対し職員がどれだけ余裕をもって対応しているか、といった職場の空気が一番の判断材料だそうです。それだけで建物の良し悪しの大半は分かるといいます。

住宅もおなじです。家の美しさは大前提ですが、建て主が愛着を持って住みこなしていただける家作りが出来たかどうかが一番大切だと思います。

② 変わったこと-社会

不安な社会

建築の世界では全てが厳密になってきています。耐震偽装を経て、確認申請をはじめ、建て主保護の観点から様々な予防やトラブル防止のための仕組みづくりが整備されてきました。

今年から義務化された新築住宅の「瑕疵担保責任保険」制度は、万一建物に欠陥などが見つかり補修する場合の費用を保険会社が補償する制度です。

加入すると、工事中に保険会社による現場検査が行われます。その結果、配筋検査は工務店の社内検査を筆頭に、設計事務所、保険会社と合計3回行われることになります。

このような疑心暗鬼な不安感は、立場は変われど設計事務所も共通して持ち始めています。ここ数年間に多くの建築家が「建築家賠償責任保険」に加入し、いざという時に備え始めています。

人も商品

コンペ形式で設計者を選ぶ建て主が増えてきました。複数の建築家に予算や設計条件を出し、間取りなどを見比べ、気に入った案を選び、設計契約するものです。

設計条件を示し、結果を見比べ選ぶのは一見効率的ですが、そうでしょうか？ 特に住宅では、建て主の新居に対するご希望がご家族の間で十分な話し合いが行われていなかったり、既成概念にとらわれて新居のイメージ作りが行われていたりするケースが多くあります。現代は情報の流れるところに資本は集中しますから、人の無意識は資本により作られている面が多々あります。工事が始まる頃になってやっと自分の求めていたものが見えてきたのでは手遅れです。

「住み手が自分自身の生き方を確立すると、暮らしにもさまざまなふうが生まれ、住まいも自由な使い回しができる」—これは建築家山本厚生氏の言葉ですが、間取りが決定するまでに、設計者と建て主が取り交わすスケッチや会話は将来を見直す大切な時間です。

また、陳列台に並んだ商品を買うように、人を選ぶようになってきたのも社会現象です。

③ 少し分ってきたこと

記憶の糸口

今年は親の法事があり久しぶりに田舎へ戻りました。この機会に村の隅々を歩き、写真を撮ってきました。

「記憶の糸をたどる」という言葉がありますが、これらの風景が糸となって友達の顔や遊びごと、自分達で探した山の食べ物などが次々に蘇ってくることに驚きます。

建築の仕事は風景を作ることでもあります。

変化の糸口

社会を被う緊張感の中で設計者は仕事をしています。ものづくりは建て主や設計者、あるいは職人にとっても、かつてはもっと楽しいものであった記憶があります。とすれば、その解決策は社会の仕組みそのものへ向かって行かざるを得ません。

建築士の視点からどんなシナリオが描けるか、考えてみました。

記憶の糸口-田舎の風景



明治生まれの父が自分の手で積んだと自慢していた石垣



村に一ヶ所あるお稲荷さん とも達だけで泊まった夜は怖かった



村に二ヶ所ある神社 祭りのお神輿はこの神社が折り返し点となっていた

シナリオ-1

便所の歴史を読んだことがあります。

汲み取り便所の出現は鎌倉時代以降ですが、決して衛生上の観点やマナーや公衆道徳の向上、あるいは羞恥心からの改善要求からではなく、し尿が肥料としての価値を認められ、交換価値のある物と認められたためだということです。どうしたら優秀な肥料を、効率的にたくさん手に入れることができるか、というきわめて実利的な目的がその出現の経緯でした。

この路線で現状社会の見直し策が出てくれば、無理なく広く賛同を得られ魅力的です。さしずめ地球温暖化やCO2削減といった緊急性から、身の回りの省エネ化が徹底され、生活スタイルからビジネスまでガラッと変わる、といったシナリオでしょうか。

しかし省エネ推進の買い替えエコポイントの点数は、製造や運転により多くのエネルギーを要する大型商品が優遇されていますから、当分は期待薄。

シナリオ-2

冬が来る前に薪の準備をするのは私の仕事です。

ご近所さんの倒木を譲り受けたり、現場の端材を集めたり、長さを揃え、大きな丸太は斧で割って薪置き場に積み上げます。乾燥の不十分な木は一シーズン寝かせる必要があります。こんな準備をしていると、ウインタースポーツをしない私にも冬が来るのが楽しみになるから不思議です。

日本の建築の寿命が極端に短いと言われるのも、手入れをしないで便利だけを欲しがるように習慣づけられてきたからです。便利さ(商品)は、過程を省略すること(お金を払う)で成り立っているのです。

手を動かすと、意識が変わる-このアプローチは期待大。

- 1 人ネットワーク作り
- 2 北海道の200年住宅の開拓
- 3 北海道のデザインを発信

いよいよマニフェストです。
達成目標の仕上げとして、最後の欄に建築賞の受賞を挙げています。
こればかりは白黒はっきり結果がでる項目です。
皆様の応援よろしくお願いします。

① 人ネットワーク作り

雨漏りや構造に欠陥がある場合の保障期間は一般的に引渡し後10年間と定められています。
これを短くすることは出来ません。
ところが、サッシ周りの内部結露による腐食などは大きな改修工事を伴い、その不具合は保障期間を過ぎた引渡し後20年30年後に表れてくるケースが殆どです。コンクリートの外壁タイルの浮きなども同じくどこでも発生しています。

これらの事例はビルのメンテナンスを行っている技術者からは数多く報告されていますが、多くは新築工事に反映されていません。

合法的な「手抜き」とも思われるこれらの工事は、現代のモノづくりの仕組みが抱える課題です。

これらの問題点に対しては保障期間の延長や保障項目の追加といったことを繰り返して改善していくのが現代の仕組みです。しかし大きな事故や費用負担の在り方などが社会問題化しない限り仕組み自体は動き出しません。

「蓄積」という言葉はビジネスマンなど文字を使う職業では評価の対象になっていますが、手や体で覚え技を使う人に対しては、一部の人たちを除き、評価の対象から外れています。

建物の質の向上は、蓄積を持つ職人がプライドを持って仕事ができる社会でしか、達成できないでしょう。

そして蓄積を積み続けている職人たちはいまだに多くいるはずです。

設計者として15年北海道で生活し、ようやく「雪」や「寒さ」が見えてきたところです。これからは北海道の「人」が見えるように活動して行きます。

② 北海道の200年住宅の開拓

暖房技術

昨年2軒の住宅で採用した床下蓄熱暖房は気に入っています。深夜電力により床下の土を数メートルの厚さで暖め、大きな湯たんぽを抱えたようにして暖房する仕組みです。仕組みはシンプルでおおらか。一冬過ごしていただき、電気代の確認もとれました。

2階の暖房が難しいのが欠点ですが、開放的な内部空間であれば対策は立てれそうです。

断熱技術

現在工事中の木造住宅の改修工事では、屋根面での外断熱を試みています。天井裏ではなく、屋根板金のすぐ下に断熱材があるため、天井を見上げると垂木があらわしとなる構造です。

改修後の小屋裏は、かなり迫力があるインテリアに生まれ変わるはずですが。

外断熱のメリットはいろいろありますが、躯体が断熱材で守られているため、温度変化の影響が少なくなり、耐久性が向上する点も大きな魅力です。

素材発見

相変わらずの関心は漆喰や土、木とレンガ、タイルと
いったところでもわり映えがしていません。

世界中で何千年の歴史のある材料と、対等に張り合える新建材はそう簡単に出現するものではありません。最新のものほど、素早く古臭くなります。

これから足と時間をかけようと思っているのは生産現場の訪問です。

より多くの素材とその加工現場へ出向きます。

直に目と手と鼻で確かめ、加工の現場では職人と言葉を交わして北海道に相応しい素材のレパトリーを増やして行く所存です。

設計図書に素材の産地指定と共に自信を持って指名できる職人さんを書き込みできるようつながりを開拓していきます。



江別といえば日本一のレンガの生産地です
レンガを使った断熱改修工事を行う職人さん

アナログ建築技術

200年住宅への対応技術

これからの住宅建設技術はどうあるべきか。
200年後、世の中どうなっているかわかりませんが、200年前といえば江戸時代です。こんな長い間には大規模なリフォームもあるでしょうし、設備や仕上げ材のメンテナンスも何度も必要でしょう。少なくとも現在建設される建物は、少子高齢化の進む社会でのニーズに対応できる建設技術で建てられるべきです。さもなければ手入れの出来ない寿命の短い建物になってしまいます。

素人でも簡単な増改築ができるような技術開発が、息の長い建設技術かもしれません。

テレビに例えれば、高機能・高性能なデジタル放送対応リモコンよりも、老人もストレスなく使えるアナログボタンが、すなわちバリアフリーの建設技術が求められているのではないのでしょうか。

3 北海道のデザインを発信

屋根のデザイン

北海道の家は、屋根の形態から2つのタイプの家作りがつつくと考えています。無落雪屋根と三角屋根の家です。現在は敷地条件や建設コストの面からの無落雪屋根の人気の高いですが、どちらが建築的に優れているといったことではありません。ひさしの力は単に躯体の耐久性向上に貢献するだけでなく、見る人に安心感をもたらします。今後もこれら2種類の屋根形状の家は立地条件や嗜好により使い分けが行われていくでしょう。庇の付いたフラット屋根住宅なども、美しい前例が少ないため、ぜひ試みたいと思います。



屋根の見える家の安心感
三角屋根の家はシンプルが原則

『津別の家Ⅱ』



無落雪屋根は北海道の切り札
まだまだデザインの可能性は広い

『円山西町の家』

テイストのデザイン

材料と形の関係

屋根形状が三角屋根でもフラット屋根でも、建物のテイストは2つのパターンに沿って展開すると思います。

一方は材料や架構方法、雪の処理や断熱性能、エネルギー対策など、設計の拠り所にできる要素を機能的に追求した結果生まれてくるデザイン。機能主義的なアプローチです。設計者の関心を持った要素によって、様々なデザインが生まれてきます。

他方は、街なかに残る地域の文化遺産に呼応した家作りです。消えかけている「場所」の空気を復活していこうとするデザインです。このデザイン手法を採用する建築家は数少なく残念ですが、近隣に何も呼応するものがない場合には、逆に場違いな独りよがりの住宅となる危険性があります。

シンボル性を正面に打ち出すデザインは、住宅では対象外としています。



『北国のコートハウス』

敷地近隣に残る美しい昭和初期の建築郡に呼応した住宅のデザイン

敷地の区画割りも開拓当初の伝統を残している

建築賞

これか5年間にいくつかの建築関係の賞を頂く予定です。信じられないかもしれませんが、30数年前、当時一番賞金が高かったコンペ(一等100万円)に応募して2等になったことがあります。

審査員は芦原義信、林昌二、宮脇檀、池原義郎、西沢文隆といった当時の建築界を代表する面々でした。

応募案の内容は、三次元映像で室内に大きなうねる川面を作り出すというものです。

授賞式後のパーティーで、これぞ一等と励まして下さったのは確か西沢文隆氏でしたが、その時以来、西沢先生のファンになりました。

いただく前から受賞理由を解説するのも気が引けますが、応募する住宅は、このmanifestoの実践版です。ローカルに根ざした技術、デザイン、材料を用いた家作りを通し、21世紀の北海道のモデルとなる住宅を提案した-というのが、高く評価された項目です。

これで受賞できない時は、審査員の見る目がないと割り切りましょう。

私の目指している家作りは、三ツ星レストランではなく、オーベルジュや家庭料理的な家づくりですから、食材は裏庭で育てた野菜であったり、調理器具はごく普通のなべ釜類、味付けは田舎から送ってくる味噌仕立て-と言った具合に、身近な材料を用いて力まず、飽きのこない調理法を採用します。

このように出来た料理の味や見た目は客観的な評価の土俵に乗せること自体難しい点があります。

先進的な技術で武装した家でもないし、造形的に作家色を強く打ち出す手法でもありません。住み手と設計者が共に「我が家が一番」と思えるような家作りなわけです

一見時代遅れ、実は最先端のアナログ技術-これは評価されるかどうか。

意識的に家庭料理の手法を採用して、我が家の味覚、地域の料理といったモノづくりにこだわれば、逆にこれが将来の一般解に通じる突破口になる、といった高い評価が得られる時代が間近に迫っているかもしれません。